

比喩表現について (14)

— フランスと日本の故事・諺・成句にみられる
天候・自然現象の語彙による比喩表現を中心として —

小倉博史

〈Résumé〉

En français, les expressions comportant le vocabulaire tiré de la météorologie expriment principalement la psychologie de l'être humain ou bien se réfèrent aux sens de la vue et de l'ouïe. Ainsi, la pluie montre 《l'ennui》, une averse, puisqu'elle est temporaire, indique 《une fin que l'on attend》, faire boule de neige signifie 《prendre des proportions de plus en plus importantes》, un coup de vent 《la rapidité》. Le vent symbolise aussi la vanité: faire du vent signifie 《se dépenser en vain》. Avoir un brouillard devant les yeux signifie 《avoir la vue troublée》, être dans le brouillard montre 《la confusion de l'esprit, l'ivresse》.

En japonais, les images diffèrent: la couleur blanche est évoquée par la neige. Celle-ci associée aux lucioles, symbolisant la lumière, indique que l'on étudie tout en gagnant sa vie. Si l'on tombe 《comme la pluie ou la grêle》, on tombe alors violemment.

0. はじめに

気圧は場所や時間によって変化し、気圧配置によりさまざまな気象現象が起こる。人間が生活する中でさまざまな気象現象を予報する天気予報は非常に重要な位置を占めている。昔、天気予報がなく、帆船で航海をしていた時代には、思いがけない時に暴風雨に遭い、難破することが多かった。そこで、漁師や船乗りは、天気の変わりに大きな関心を持ち、空模様を見て天気の変わりを予想していた。しかし、気象に関する知識が増し、通信が発達し、暴風雨の襲来が科学的に予想されるようになると、まず船舶に対する暴風雨警報の仕事が始まり、それを利用するようになった。そのおかげで船舶の遭難はずっと減った。そして、それが進んで、一般の人たちへの天気予報が出されるようになった。

今日では、船舶や一般の人たちのためだけでなく、航空、農業、電力、土木工事など、交通、産業のためにも出され、広く利用されている。

20世紀前半、気候と人類史の関係について大胆な仮説を提唱したのが、米国人の地理学者エルズワース・ハンチントン¹⁾(1876-1947)である。フランス革命はなぜ1789年に起きたのか²⁾。本稿ではフランスと日本の故事・諺・成句に見られる天候、自然現象の語彙による比喩表現を取り上げ、それぞれの気象現象に対するフランスと日本の捉え方を比較することにする。

1. フランスと日本の故事・諺・成句にみられる気象・自然現象による表現

1) pluie・雨

[諺] Après la pluie, le beau temps. (雨の後は晴れ→) 苦あれば楽あり

[退屈] ennuyeux comme la pluie ひどく退屈な

雨には飽きるが天気には飽かぬ：良い天気が続くのは気にならないが、雨が続くと退屈で気分が悪いということ

[一挙に] en pluie 雨のように

雨の降る程：非常に多いことをたとえていう。たくさんあるさま。

[うぶではない] ne pas être né[tombé] de la dernière pluie (最新の雨に遭わない→) 経験豊かである、うぶではない

[つまらない話] parler[causer] de la pluie et du temps (雨と晴天の話をする→) 当たり障りのない [つまらない] 話をする

[諺] Petite pluie abat grand vent (小雨が大風を静める→) ちょっとしたこと大騒動が収まることもある

[大難] se mettre[se coucher] dans l'eau de peur de la pluie³⁾ (雨を恐れて水のなかに入る→小難を避けようとして大難を招く

雨に濡れて露恐ろしからず：大きな難に遭うと、小さなことは気にならない。

[諺] faire la pluie et le beau temps⁴⁾

[激しく降り注ぐ] 雨霰のごとし：弾丸などが激しく降り注ぐさまにいう。

雨、車輪のごとし：雨脚を車輪に見立てて大粒の雨が降るという事

[終わりは同じ] 雨霰や雪や氷と変われども落つれば同じ谷川の水：雨・霰・雪・氷というように元はいろいろであっても同じ谷川の水になってしまう。はじめは異なっている、終わりは同じであるということ。

[適当が良い] 雨多ければ則(すなわ)ち爛(ただ)る：物事はほどほどがよいということ。

[雨が止む] 雨が上がる：降っていた雨が止む。

[固い決意] 雨が降ろうと槍が降ろうと：たとえどんなことがあろうとも、必ずやるという気持ちを表す言葉。

[苦勞する] 雨に沐(かみあら)い風に梳(くしけず)る：雨や風にうたれて苦勞する。世の中のさまざまな苦勞を味わう

[美人] 雨にしおれし海棠の花：美人の憂い顔をいう。

[美しい女性] 雨を帯びたる桃季 [桃桜・花]：雨に濡れて色つやの美しい桃や李または桜の花。美しい女性の形容として用いる

[変幻自在] 雨に添うた風：相手次第でどんなふうにも変わるものだという事。雨は風によって降り方が必ずしも同じでないことからいう。

[雨の降る音] 雨の脚音：雨の降る音。和歌などでは人の足音にたとえていう。

[家の繁栄] 雨の脚より人の脚：(雨の絶え間なく降ることにかけて、しゃれていう) 人の絶え間なく出入りすることが家の繁栄を示してめでたいことである。

[よりよい状態] 雨降って地固まる：雨が降ったあと地面が固まるように、困難な事や悪いことがあったあとなどに、その試練に耐えて、かえってよりよい状態になること

[もてなすこと] 雨を冒して萑を剪(き)る：友人の来訪を喜んでもてなすことにいう。

[泣くこと] 雨や雨(さめ)：「さめ」は春雨など複合語の時に雨をいう語：雨が降りしきるように、さめざめと泣くさまにいう

[多忙] 雨も風も一緒：一度にいろいろなことが起こって忙しいさまにいう。

フランス語と日本語に共通しているのは、雨が退屈なものや災難であるということ、フランス語だけにみられるものとしては、雨と晴天の話をするところからつまらない話をする、最新の雨に遭わないことから経験豊かであるの意である。日本語だけにみられるものとしては、雨、霰のごとくから激しく降るの意、雨に沫(かみあら)意風に梳(くしけず)るから苦勞するの意、雨に打たれたさまざまな花から美人の意、雨降って地固まるからよりよい状態になることなどの意である。

2) *averse*・にわか雨

[やり過ごす] *laisser passer l'averse* (にわか雨が通り過ぎるのを待つ→) (怒り、非難などの治まるのを待つ、やり過ごす)

[最新の] *né de la dernière averse* (最新のにわか雨の中で生まれた→) ごく最近の

[多量の] *une averse de* + 無冠詞名詞 たくさん [多量] の

[面の顔の厚い] 夕立雲：(夕立の降る前兆の雲が出る頃、ひどく熱いのを、「厚い」にかけていう) 面の顔の厚いもののたとえ

[一時的] 夕立は一日降らず：夕立は一時的につよく降るが長続きするものではない。

[化粧の落ちた顔] 夕立に逢った吊し柿のよう：汗などで白粉がはげて、赤黒い地肌の見えはじめた顔の形容にいう

[続く]：夕立は三日：一日降ると、三日ぐらい続けて夕立がくる。夕立は一度降ると日を続けてくることをいう。

フランス語だけにみられるものとしては、にわか雨が多量の意、にわか雨が通り過ぎることを待つことから怒り、非難などの治まるのを待つ意にわか雨の中で生まれることから最新の意。日本語の夕立は一時的な意、夕立に逢った吊し柿のようから化粧の落ちた顔の形容である。

3) *neige*・雪

[純白] *blanc comme neige*⁵⁾ (雪のように白い→) 純白な

雪の肌：雪のように白くて美しい皮膚

雪を欺く：その白さが雪に引けを取らないほどである。非常に白いさまの形容。

[白髪] 雪を戴く：髪が白くなったさまにいう

[黒人] boule de neige (雪球→) (軍隊で反語的に) 黒人

[言い包める]：雪を墨：白い雪を黒い墨だと言い包める。

[増える] faire (la) boule de neige⁶⁾ (雪球を作る→) 雪だるま式に増える

[引用] Mais où sont les neiges d'antan⁷⁾ さあれ去年 (こそ) の雪いまいずこ

[消える] fondre comme neige au soleil (日向の雪のように溶ける→) はかなく消える

雪に湯を掛けるよう：たちまち消えてなくなることのたとえ。

[蛭雪] 雪を積み蛭を集める：貧苦に耐え、苦勞して勉学する。

[正反対] 雪と墨：物事の正反対であること。

[見分けのつかないこと] 雪に白鷺：ともに白色であることから、見分けにくいこと。

[晴天] 雪の明日は孫子の洗濯：雪の降った翌日は晴天になって洗濯に適するような暖かい日が多いことをいう

[豊作] 雪の多い年は豊作：雪は豊年の瑞 (しるし)

フランス語と日本語に共通しているのは雪の色から純白なの意。前者では日向の雪のように、後者は雪に湯をかけるようから消えるの意。フランス語だけにみられるものとしては雪球から反語的に黒人の意、雪球から雪だるま式に増えるの意。日本語だけにみられるものとしては、雪を積み蛭を集めることから苦学するの意、雪と墨で色が対照的であることから物事の正反対であることの意、ああ雪に白鷺でともに白色であることから、見分けにくいことの意、雪が翌日の天気や農作物の出来の手がかりになることなどを表す。

4) vent・風

[古・諺] A brebis tondue, Dieu mesure le vent (毛を刈られた雌羊には神が風を加減する→) 神は弱き者には手心を加えてくださる

[素早く] aller[courir] comme [plus vite que] le vent (風のように早く進む→) 素早く行く、あっという間に行く

[四方八方] à tous les vents = aux quatre vents (すべての風に→) どの方向にも

[成行きに任せる] aller selon le vent (風に任せて進む→) 成行きに任せる

風が何処を吹くやら：少しも気にしない様子をたとえていう。

[空約束] Autant en emporte le vent (風にさらわれてしまうだろう→) あとには何も残らないだろう、それは当てにならぬ話 [空約束] だ

[千鳥足] avoir du [le] vent dans les voiles⁸⁾ (帆の中に風をもっている→) 酔っ払っている、千鳥足である

[順調] avoir le vent en poupe[dans le dos, dans les voiles] (帆の中に追い風をもっている→) 順風満帆である、順調に進んでいる

[知る] avoir vent de qc. (～の風をもつ→) ～を風の便りで知る, かぎつける

風の便り: 風が運んでくるもの, 風という伝え手, 使者

[万難を排して] contre vents et marées (風と潮に逆らって→) 万難を排して, 是が非でも

[流行の] dans le vent (風の中で→) はやりの, 当節流行の

[疾風のように] coup de vent (風の一撃→) あっという間に

風を追う: 風を追うように早く走る, 疾走する

[乱れ髪] être coiffé en coup de vent (疾風で調髪した→) 髪が乱れている

[威張る] faire du vent⁹⁾ (風を起こす→) 大物ぶる, 威張る

風を吹かせる: 地位や身分などを鼻にかけて威張る

風を切る: するどく, 勢いよく動く, 威勢よく歩く

[自由] être libre comme le vent 風のように自由である

[自分勝手] faire le vent et la tempête (風と嵐を起こす→) 気ままに事を運ぶ

[何も食べない] humer le vent[du vent]¹⁰⁾ (風を吸い込む→) 何も食べずにいる

風を呑み霞を食う: 穀物を食べないで, 風と露で生命をつないでいるといわれる

仙人の生活を言う

[撒き散らす] jeter au vent (風上に投げる→) 撒き散らす, ばらまく

[見守る] prendre le vent = voir[observer] d' où vient le vent (風向きを見る→) (情勢の) 成行きを見守る

Selon le vent, la voile¹¹⁾

風見て帆を使え: 状勢をよく見て行動せよということ。

[変わる] tourner[virer] à tout vent[à tous les vents] (あらゆる風で曲がる→) (意見, 考えが) ちょっとしたことですぐに変わる, 非常に影響されやすい

風にそよぐ葦: 風の吹くままにそよいで揺れる葦。力のある者の言うままになる定見のない者のたとえにもいう。

風に草靡(なび)く: (草は風の吹くままになびくことから) 力ある者のいうままになる

風が変わる: 風が変わる。転じて, 物事の状勢・事態が変わる

風の吹き回し: その時のなりゆきで気分が一定しないことにいう。物のはずみ

[大切にすること] 風にも当てぬ: 大切に養育すること。

[あしらう] 風に柳: 相手の勢いに逆らわないで, 適当にあしらうさまのたとえ。

[初夏の風] 風薫る: 初夏に風がさわやかに吹くことをいう。

[瘦身, 衰弱] 風が吹けば倒れそう: 大変に痩せている, 衰弱しているさまのたとえ。

[不利] 風が悪い: 風の方向が悪い。転じて形勢が悪い, 不利である。

[不安] 風吹けば木安からず: 事件があると, その影響を受けて人の心も落ち着かなくなることをいう。

[容易に成功] 風に順 (したが) いて呼ぶ: (風にのって呼ぶと遠くまで聞こえることから)
勢いにのって事をなせば早くかつ容易に成功するたとえ。

フランス語と日本語に共通しているのは風が情報の伝え手になるということ, 前者は風を起こす, 後者は風を吹かせるから威張るの意, 後者は風を切るから威勢よく歩くの意, 前者は風を吸い込む, 後者は風を呑み霞を食うことから何も食べないの意, 前者は風向きを見る, 後者は風を見て帆を使えから成行を見守るの意, 前者はあらゆる風で曲がる, 後者は風にそよぐ葦からすぐに変わる, 力のある者の言うままになるの意, 前者は風の一撃, 後者は風を追うから疾風のようにの意, フランス語だけにみられるものとしては, 風のようにという直喩から自由の意, 風と嵐を起こすことから気ままに事を運ぶの意, 風上に投げることからばらまくの意, 日本語だけにみられるものとしては, 風が変わる, 風の吹き回しから物事の情勢・事態が変わることや気分が一定しないことの意, 風にも当てぬから大切に養育することの意, 風薫から初夏のさわやかな風が吹くことの意, 風吹けば倒れるから瘦せている, 衰弱していることのとえ。

5) brouillard・霧

[酔っ払う] abattre le brouillard (霧を鎮める→) 酔っ払う, (ノルマンディー地方で) 朝方軽く一杯やる

[見えない] avoir un brouillard devant[sur] les yeux (目の前に霧をもつ→) 目がかすむ, (事態が) はっきり見えない

[あやふや] Cela repose sur les brouillard de qc. (古) (それは～の霧の上ののっている→) ～にかかる霧のようにあやふやである

[吹き払う] chasser le brouillard (霧を追い払う→) (強い酒などを飲んで) 頭のもやもやを吹き払う

[ほろ酔い] être dans le brouillard (霧のなかにいる→) 五里霧中である, 寝ぼけている, ほろ酔いである

[猪突猛進] foncer dans le brouillard (霧のなかに突進する→) やみくもに突き進む

[五里霧中] n'y voir que du brouillard (そこでは霧しか見えない→) 訳がわからない

[雲隠れする] s'évanouir dans le brouillard (霧のなかに消え去る→) 不意に姿をくらます

[天候の俗説] 霧深ければ三日の内に雨降る

[香を焚く] 霧不断の香を焚く: 霧が常に立ちこめて, 絶え間なく香をたいているようである
フランス語では霧は頭の中や目の前がもやもやしていることの意であることから, 目がかすむ, 寝ぼけている, ほろ酔いである, 軽く一杯やるなどの意である。日本語では天候に関する俗説である。

6) tonnerre・雷鳴

[はるかかなたに] au tonnerre de Dieu (神の雷鳴に→) はるかかなたに

- [突発事故] coup de tonnerre¹²⁾ (雷鳴→) 思いがけぬ事件, 突発事故
 [恐ろしいこと] 雷は逃げ場がない: 火難水難などに比べてずっと恐ろしいことをいう
 [雷鳴のような] voix de tonnerre 雷鳴のような声
 [素晴らしく] marcher le tonnerre (素晴らしく進む→) 絶好調である
 [諺] Le tonnerre ne tombe pas toutes les fois qu'il tonne (雷は鳴るたびに落ちるわけではない→) 凶兆 [脅迫] は必ずしも現実とはならない
 [叱られる] 雷が落ちる: 目上の人からひどくどなりつけられて叱られる
 [離れない] 雷が鳴っても離れない: 容易に離れないことのたとえ
 [俗説] 雷が臍を取る: 腹を出した子供を戒めるときに言う語
 [時期] 雷は冬発せず霜は夏降らず: 物事にはそれぞれ時期があるというたとえ
 [梅雨明け] 雷が鳴れば梅雨が明ける: 梅雨明けの目安を示した語
 [静かになる] 雷が落ちた宿のよう: 今まで大変騒がしかったのが急に静かになることのたとえ
 [地域の諺] 雷が北で鳴ると梅雨が晴れる: 大隅地方の諺

フランス語では雷鳴から思いがけぬ事件, 突発事故の意。日本語では雷は逃げ場がないことから恐ろしいことの意, フランス語だけにみられるものとしては神の雷鳴にからはるかかなたの意。諺で雷鳴は鳴るたびに落ちるわけではないことから脅迫は必ずしも現実とはならないの意。日本語だけにみられるものとしては, 雷が落ちることからひどく叱られるの意, 雷が鳴っても離れないことから容易に離れないことのたとえ。雷が臍を取るから腹を出した子供を戒めるときに言う語。

7) éclair・稲妻

- [一瞬] avec la rapidité de l'éclair¹³⁾ (稲妻の速さ→) あっという間に, さっさと
 [素早く] comme l'éclair [un éclair] (稲妻のように→) (動き, 移動について) 素早く
 [前兆] 稲光は豊年の兆(しるし): 稲光がするのは稲がよく実る前兆である。古く, 稲は稲光によって霊的なものと結合し, 米を実らせると信じられていた。

フランス語だけにみられるものとしては, 稲妻の速さ, 稲妻のようにから, あっという間にの意。日本語だけにみられるものとしては稲は稲光によって霊的なものと結合し, 米を実らせると信じられていたことから稲光は豊年の兆。

8) gelée・霜

- [抜け出せない] être dans la gelée (霜のなかにいる→) (競走馬が) 集団から抜け出せない
 [白くおおう] 霜が置く: 寒い朝に, 霜が物の上を一面に白くおおう
 [白い] 霜の鶴: 羽の白い鶴。羽毛の白さを霜にたとえていう語。

[天候・俗説] 霜の消えるのが早いときは雨

[活気を失った] 霜の下の花：霜にあって萎れた花。勢力や活気を失ったもののたとえ

フランス語だけにみられるものとしては、霜の中にいることから競走馬が集団から抜け出せないの意、日本語だけにみられるものとしては、霜の下の花から活気を失ったものの意、白さを表したり、天候に関する俗説などである。

2. おわりに

フランス語では天候や自然現象を表わす語彙が人間の心理的な感情、視覚や聴覚に対して与える印象に基づく表現、たとえば雨は退屈な意、にわか雨は一時的なので、治まるのを待つ意、雪は白い意、雪球を作ることから雪だるま式に増える意、風は虚栄、慢心を象徴することから威張るの意、風の一撃から疾風の意、霧は頭の中や目の前がもやもやすることから寝ぼける、目がくらむ、ほろ酔いであるなどの意、稲妻からあつという間の意、大気中の水蒸気または地中の水分が地上の物体の表面に凍りついたものが霜であることから競走馬が集団から抜け出せないことの意などである。一方、日本語では、雪の肌のように視覚に基づいた表現もあるが、情緒的なものが主である。たとえば雨、霰のごとしから激しく降るの意、雪と蛍から明かりを取ることから苦学するの意、雪と墨で色が対照的であることから正反対であることの意、天候に関する俗説、風にも当てぬから大切に養育することの意、風薫から初夏のさわやかな風が吹くの意、雷りがなっても離れないから容易に離れないの意、雷が臍を取るから腹を出した子供を戒める表現、稲妻と稲を結びつけ稲の豊作の前兆、霜の下の花から活気を失ったもののたとえなどである。

[注]

- 1) 「もし気候の変化が歴史時代に発生したとすれば、必ずや人類に影響を与えたに相違ない。(中略) 歴史的な事件と気候の変化との間における密接な関係は想像以上に重大なのであって、往昔の幾多の大民族の興亡は、その気候的条件の良否に正比例しているようである。」(ハンチントン、エルズワース著：「気候と文明」pp. 23~24)
- 2) 「ヨーロッパの場合、寒冷な気候は1785年まで続いた。ブリテン島では北極振動や北大西洋振動が正の値を取ると暖かい南西風が吹く回数が増える。南西風が吹いた平均日数をみると、1861年から1978年にかけて91・5日であったのに対し、1781年から1786年にかけては66日へと減少し、1785年はわずか45日しかなかった。ところが、1788年になると、一転して熱波と干ばつが到来した。ブリテン島南部の年間降水量は、250年間の平均の63%と一年の量としては最も少なくなり、1786年のパリでは半年の67%の雨しか降らなくなる。日照りと夏の雷雨は農作物の大凶作をもたらし、穀物価格は上昇した。フランスでは、1788年に、1788年に春先から何か月も日照りが続いた後、7月13日に大西洋から湿った空気が流入したことで40万トンといわれる雹が降り、小麦の栽培が壊滅的になった。この結果、フランスの労働者の収入に占めるパン消費支出の割合は、それまで55%程度であったものが、1789年には88%へと跳ね上がった。フランス革命は、旧制度(アンシャン・レジーム)と呼ばれる社会の疲弊によって起きたものであり、気候の変動を主因とするのは行き過ぎだろう。ただし、遅かれ早か

- れ社会変革が起きたにせよ、なぜ 1789 年という年に革命が勃発したのかとの背景を考える際、前年からの天候変化によって農民や労働者が窮乏していた状況のあったことを忘れてはならないだろう。(田家康著：「気候文明史」PP 235～236)
- 3) (架空の人物名) Gribouille (避けようと思っていた難儀に飛び込んでしまう) 間抜けな人間の寓話の引喩
 - 4) 神々の王ゼウスあるいはジュピターは天を支配し、思うままに雨を降らせ、また上天気にすると思われていたので、この故事から出た。またこの成句は古代に神様として尊敬されていた占星学者を、「雨を降らせ上天気にする人」と呼んだことから出たとす説もある。(田辺貞之助：「ふらんす故事ことわざ辞典」P. 34)
 - 5) neige は「白さ」「静けさ」「寒さ」を強調する。
 - 6) 斜面を下りるに従って大きくなる雪球の類推から。
 - 7) フランソワ・ヴィヨンはこの一句を使い、Mais où sont les neiges d'antan? (さあれ去年の雪はいまいずこ) をリフレンして、歴史上の美女をしのぶ哀切の詩を物した。d'antan は元来は去年だが、16 世紀以来意味が広がって遠い過去のことにも使う。(田辺貞之助：前掲書、p. 36)
 - 8) 風の気紛れから追い風を受けたり、向かい風を受けたりすることから。
 - 9) vent は 12 世紀から虚栄、慢心を象徴している。
 - 10) vent は空気、呼吸の意である。
 - 11) 船の帆の張り方は風の強さや方向などによって非常に注意を要する難しい仕事だ。従って、風に応じて帆の張り方を工夫しなければならないが、これと同じく、何事をなすにもその性質、種類ないしは自分の能力に応じて対策を定めろの意。この諺は丁寧に Il faut prendre sa voile selon le vent. (風に応じて自分の帆を張らねばならぬ) ともいう。(田辺貞之助：前掲書、p. 35)
 - 12) 17 世紀半ばから。
 - 13) éclair は特別に速い意以外にはない。

[参考文献]

- 「講談社百科事典」第 18 卷 (1982) 講談社
 「小学館ロベール仏和大辞典」(1988) 小学館
 田家康 (2010)：「気候文明史」日本経済新聞社
 田中秀央 (1970)：「研究社羅和辞典」研究社
 田村毅他編 (2005)：「ロワイヤル仏和中辞典」第 2 版 旺文社
 ハンチントン著、間崎万里訳 (1985)：「気候と文明」岩波書店
 エマニュエル・ラデュリ著、稲垣文夫訳 (2005)：「気候の歴史」藤原書店
 A, Rey et S, Chantreau (1985)：Dictionnaire des expressions et locutions Robert

